慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 原始民族に於ける交換の意義 |
| Sub Title | |
| Author | 阿部, 秀助 |
| Publisher | 三田学会 |
| Publication year | 1912 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.6, No.4 (1912. 10) ,p.647(53)- 666(72) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19121000-0053 |
| Abstract | |
| Notes | 論説 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19121000-0053 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

胡蘆を描いて漫に此制度を採つて居るのであるが(商法八條。商法施行法七條、明治三十二年勅令二七一號、拙著商法原論一一八頁以下參照)余は之を頗る理由なきものと考へる商人的設備を有せざる小營業者には商法の規定を適用する必要はないのであるから宜しく截然之を商人に非ざるものとすべきである之を小商人とし商人にして而も商人の設備に關する重要なる規定の適用なきものとするは何等の理由もないのである此の如き中途半派のものを認むるに至つたのは蓋し營業の實質に依つて商人の意義の定むる主義より生じたる餘弊と謂ふの外はないと思ふ既に獨逸舊商法編纂の當時に於て小營業者を全然商法適用の範圍より除外せんとする實際的卓見があつたのであるが (Kritik im Bremer Handelsblatt Nr. 363 ff.) 不幸にして多數の反對說があつて (Z. B. Anschütz, Kritische Vierteljahrschrit I. S. 21 ff.; Goldschmidt, Gutachten S. 16 ff.) 其採用を觀なかつたのは遺憾である (Vergl. Motive des R. H. GB. S. 7 ff.) 若し夫れ當時に於て小商人も其他の商人も全然同一に取扱ふべく小商人に對し除外例を設くる必要なしと論じたる者ありたるに至つては (Endemann, Kritik S. 15 ff.) 學者の事務を識らざるもまた甚しきものと言ふべきである



# 原始民族に於ける交換の意義

阿部秀助

「吾人は何故に現時に於ける吾人の經濟生活と極めて緣遠き原始民族の生活狀態を研究する必要あるか」此疑問に對して吾人の答ふる處は極めて簡單たり、凡そ吾人の智識は出來る丈け其原因を明にするによりて眞の知識たるが如く、我等の經濟現象も亦た溯て原人に近き原始民族を研究するによりて、自から其眞相に近きものを發見するを得べし、例へば經濟上に於て重要なる意義を有する分業の如き、極めて不完全ながらも既に原始民族に於て發芽せるとは內外に於ける幾多の證左の吾人に示す處にして、卽「ラッチェル」によれば、亞米利加の內地には只だ刀槍の類のみ製作する治工の村あり、又た「ニューギニア」にては專ら土器のみ製造する村あり、更に北亞米利加にては石鏃のみ製造する處ありと(F. Ratzel, Voelkerkunde. B. I. s. 81)、又た「レクリュー」によれば「フィヂー」群島にては水手、漁夫、料理人等の職業は一定の部族

によりてなさる、其他斯くの如き分業は、ザムベシー上流の土人中にも、又た亞弗利加の「ツアレグ」族の中にも多く、(Réclus, Nouvelle Géographie Universelle, XI,669 u. 840) 又た濠洲に於ける北方種たる「ヂンヂリス」及「ワルラムンガス」兩族が其地方に石材の產地を有するの故を以て最良の石刀を製作するが如き、更に我邦の古史を繙きし人は朦げながら略ぼ以上と同一の事實に逢着するならむ、卽ち

天地剖判之初、天中所生之神、名曰天御中主神。次高皇產靈神。次神皇產靈神。其高皇產靈神所生之女名曰栲幡千千姬命。其男名曰天忍穗命。大伴宿禰祖也 又男名曰天太玉命。齋部宿禰祖也 太玉命所率神名曰天日鷲命。阿波國忌部祖也 手置帆負命。讃岐國忌部祖也 彥狹知命。紀伊國忌部祖也 櫛明玉命。出雲國忌部祖也 玉作祖也 天曰一箇命。筑紫伊勢兩國忌部祖也 於是素戔嗚神欲奉辭日神昇天之時。櫛明玉命奉迎獻以瑞八坂瓊之曲玉。……于時天照大神赫怒入于天石窟閉磐戶而幽居焉。爾乃六合常闇晝夜不分。群神愁迷手足罔措。凡厥庶事燎燭而辨。高皇產靈神。會八十萬神於天八湍河原議奉謝之方。爰思兼神深思遠慮議曰宜令大玉神率諸部神造和幣仍令石凝姥神天糠戶命三子取天香山銅以鑄日像之鏡令長白羽神伊勢國麻績祖也 種麻以爲青和幣令天日鷲神以津咋見神殖穀木種以作白和幣令天羽槌雄神八倭文遠織文布云々(古語拾遺二—四)

蓋、混沌たる雜子の中に、既に將來の要素の宿れることを信ずるものは、又た現時の經濟生活を研究するに就きて、原始民族研究の必要なる所以を知るに足らむ、然り此必要なる原始民族の研究によりて在來の學說に一異彩を放たしめしものを「ブヒヤー」教授の原始民族非交換說となす、卽ち同教授の云ふ處によれば、

「國民經濟的意義に於ける商業、卽ち之れを詳言すれば、自己が利益を得て轉賣する目的に向て規則的に職業的に組織せらるゝ物品の仕入は、自然人の間には決して存在せず、彼の亞弗利加の土人中に商業を營むものゝ如きは歐洲及亞刺比亞商人によりて發生せる媒介的行爲、然らずば蘇丹の半開化地方に屬する現象たり、只だ土人間には尙ほ各所に種族間の交換的交通存在す、而して之れが原因に至りては單に天與の事物の特殊なる存在と、各種族によりて其が生產的技術の發達の程度に於て種々異なるのみ、若、夫れ同一種族に屬するものにあつては何等規則的交換の交通あることなし、何となれば總ては同一の財を生產し、且つ

家族の永久的關係の基礎たる職業的組織を缺けるを以てなり。

文明人は自己の欲する處を市場又は「デパートメント、ストア」にて容易に貨幣を以て求め得る理由よりして、交換其者の成立する所以に就きては極めて輕々に考ふるの弊あり、然れども自然人にありては彼等が遙かに發達せる種族と接觸する以前にありては價値又たは直段に就きては其思想を缺けり、卽ち初めて濠洲を發見せし人々が其報告に於て一致する處は同大陸にありても、又た附近の島嶼にありても、土人は交換の何たるを解せざると共に、是等の發見者が彼等に與ふる裝飾品に就きても極めて冷淡にして又た强迫的に受けたる贈物は森林中に放擲して毫も意に介せざる風あり、以上の事實が又た「ブラジル」の印度人に存在することは「エーレンライヒ」及「カール、フォン、シュタイネン」兩氏の吾人に告ぐる處なりとす、而して是等の種族間には活潑なる交通存し、其間、土器、石斧、蓆、綿絲、貝製の頭飾其他類似の製品を相互に授受す、抑も斯くの如き現象は交換及商業なくして如何にして可能なるを得るか、此謎を解決するは極めて容易なり、卽ち是等物品の授受は多くの場合に於て贈與の方法によりて行はれ又た時に奪掠、分



捕、貢獻、財產罰、賠償、賭博の方法によりて行はる、之れに反して同一種族間にありては食料の如き全く共同的にして、例者、一頭の牛を屠殺する際、若隣人に告げずして之れをなす時は、竊盜と見做さるゝが如し、尙ほ食時、其前を通過する人を招待せざる場合も亦た同じ、卽ち各人は自己の欲する小屋に入り、自由に食事を要求するを得、此場合には、決して主人は拒絶するを不得、云々 (Karl Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft, siebente Auflage, s. 60–62)

思ふに「ブヒヤー」教授の所謂、自然人 (Naturölker) は經濟上の見地よりして低度の人種なる點に於て、又た現時の吾人よりも容易に自然に支配せられ、且つ自然の威力を感ずる點に於て、(Karl Bücher, Entstehung der Volkswirtschaft, siebente Auflage, s. 41) 論者の所謂、原始民族と相同じ、然かも以上、揭げし同教授の論證を讀みし人は、其間、幾多の疑問に逢着せらるゝならむ、卽ち自己の利益の爲め規則的に職業的に組織せらるゝ物品の仕入とは果して如何なる範圍までを云ふか、將た此の如き組織は絕對に原始民族間に存在せざるか、亞弗利加の土人にして商業を營むものは一に歐洲人及亞刺比亞商人の指導による外は、只だ蘇丹の如き半開化地方のみに見る現象

たるか、分業ありて後ち交換の現象あるか、或は寧ろ分業の以前に交換の現象なきか、同一の種族間には常に同一の財、生産せらるゝや、原始民族の製品(例へば石器及土器の如き)の上に彼等の趣味性は何等の意義を有せざるか、換言すれば吾人の趣味性は經濟上、何等の價値を有せざるか、職業的組織は彼等の家族には全然缺如せるや、原始民族は彼等が遙かに發達せる文化を有する高等人種に觸接せざる以前には彼等は全く價値の觀念を缺きしものなるか、思へ、自己より遙かに優等なる人種が齎らしたる物品の用度を解せざる時、如何にして交換の發現的要素たる價値の判定は出來得べきぞ、例へば德川の初期、和蘭人の來りて我邦と通商を營むや、主として自國にて賣行よきものを齎らせしが、當時の邦人には其用度と自己の趣味性に適合せざりし結果、之れが賣行惡しく非常の損耗を被むれりと、若、此事實を以て當時の日本人は交換の念に乏しとせば如何、そは果して當時の日本の經濟生活を理解せる人と云ふを得可きか、而して同教授が原始民族非交換説の證左として使用せる濠洲に於ける初期の發見者の報告と、「ブラジル」印度人の事實とは共に所説を確むる有力なる證據物件たるを得るか、之れを前者に就きて見るに此誤を傳



へしものは實に「クック」なりとす、即ち彼が濠洲南東部の土人に關する報告中に「土人は贈物に對して何等明白なる滿足の意を表せず、麵麭を與へても與へしものに返却し、然らずんば別に何等の代償を拂はずして受取るを常とす、要するに彼等は贈物に對して、極めて冷淡にして、全く何等の好奇心を有せざることを現せり」と(Captain James Cook's and Captain James King's Voyage in Voyage to the Pacific Ocean, undertaken by Command of his Majesty for making Discoveries in the Northern Hemisphere, London, 1788, I, 50 u. 57)然かも此報告が極めて皮相的の觀察なることは、今日、此方面の研究に從事せるものは誰人にても異論なき處なりとす、その他「ダムペエー」の同じく濠洲土人の研究に於ける「ルヴォラン」の「ホッテントット」人に於ける「ワリス」の「マゼラン」海峽の北方に住せる土人に於ける「ヘルレラ」の亞米利加土人に於ける「ラビラルデェール」の「サモア」群島の土人に於ける、(Grierson, the silent Trade, p. 20-21. u. A. Sartorius Freiherr von Walterschausen, Die Entstehung des Tauschhandels in Polynesien, Zeitschrift für Sozial u. Wirtschaftsgeschichte. IV. 1896, s 5-9)何れも正鵠を得たるの觀察にあらず、斯くの如く同じ旅行記にても其間、玉石混合の狀態なり、初度の報告たりとて必ずしも信ずるに足らず、況んや此大問題

を僅かに濠洲及「ブラジル」土人の狀態によりて輕々論斷するが如きは吾人の到底贊する能はざる處なり、蓋「ブヒヤー」教授をして斯の如き論斷をなさしめし所以は、彼の思索上に於て其が經濟階段説、殊に自足經濟なるものと極めて密接の關係ありと信ず、或る意味に於て彼の經濟階段説は此原始民族非交換説を生みしものと云ふを得べく、又後者は前者の逃路たること尙ほ「カント」の Ding an sich に似たるものあり、之れを要するに彼の新説の弱點は(一)證據物件の不充分と研究材料の選擇、當を得ざること(二)經濟階段説の論理的結果として生れし故、自から現實を遠かりて一種の Idealtypisch となりしこと(三)彼の研究には「ランケ」の所謂、Mitwissenschaft あるも Mitgefühl なし、然らば吾人は此説の反證を如何なる種族に求め、如何なる材料に求む可きか、之れ次ぎに來る問題たり。

最近、自然科學の方面に於て最も顯著なる進歩をなせるものは、人類學、殊に人類の祖先に關する研究となす、卽ち數年前迄は吾人々類の祖先は現時棲息する Gorilla, Schimpanse, Orang 等の猿猴類と同族なりと思考せられしが、今は全く異なりたる見解を生ずるに至り、一時、猿猴的人類の標本として有名なりし Pithecanthropus erectus (「ジャバ」より出でしもの)も今は全く純然たる猿に外ならざること證明せられ、此新見解は益々其勢力を加ふるに至れり、而して之れが中心的人物は「ブレスラウ」の人類學者「クラーチ」にして其説を贊するものに「ショエテンザック」「アドロフ」「ストラーツ」「ブランカ」等なり、今ま三四年前發見せられし人類最古の化石(其一は獨逸、ハイデルベルヒ」より出でし最古の洪積層時代(氷河時代)の人類の下顎骨、他は佛國の「ル、モスチェー」及「ラシャペール」より出でし中期洪積層時代の骸骨)に就きて以上の諸學者が研究せしものを見るに、是等の人類は其骨骼に於て毫も現時の人類と異なることなく、既に最古の氷河時代に於ける人類の文化は頗る進歩せるものにして、彼等は死者を葬り、發火の術を知り、諸種の武器、道具を有し、且つ其穴居の狀態は最古の石器時代に屬する「タインゲン」の遺跡と異ならずと云ふ、吾人は元より是等原人の生活狀態に就きて明白なる知識を有せずと云へども、然かも以上、人類學者の説を以て、現時、世界に於ける最低度の文化を有する原始民族に比する時は其間必ずしも大なる相違なきが如し。

現今、最低度の原始民族を何處に見出し得るやに就きては諸學者の説く處に於

て、自から一致せる點あり、英の「スペンサー」は「ブォイエルラント」人、濠洲土人、「森のウェーダ」、「ブッシマン」、「ネパール」の「チェパング」及「クスンダニ」、「タスマニア」人、「アンダマン」を算へたり、而して彼が是等の種族を以て文化の極めて最低度なるものとなす理由は、彼等の社會の極めて不統一なると、政治上の君主を缺ける點にあり、(Spencer, The Principles of Sociology, I, p. 539)「ダーウィン」は主として文化の見る可きものなきの理由にてフォイエルラント」人を以て最低度のものとなし、濠洲人を以て稍々之れに近きものとなせり、(Darwin, Voyage d'un naturaliste, 2 éd. Paris, 1883, p. 247)「ワーレス」は主として人類學上の見地よりして濠洲人を以て最低度のものとなし、(A. R. Wallace Studies Scientific and Social, London, 1900. I. 468) 又たそれと同一の意見を有するは「クラーチ」及「モルガン」として (H. Klaatsch, Ueber den Austral Kontinent and seine Urbewohner nach einem Referat des "Hamburgischen Korrespondenten", 8. Januar 1908. u. L. H. Morgan, Ancient Society, Chicago, 1907, p. 17 a 49)「ペセル」は同じく人類學上の見地より「ブッシマン」、「ウェーダ」、「シンコピー」濠洲人、「タスマニア」人、「フォイエルラント」人、「ボトクデン」を擧げ、(Peschel, Voelker kunde, 5 Auflage 1881, s. 144.)「ティロア」は「タスマニア」人を最低度の石器時代にあるものとなせ



り、(Edward. B. Tylor, Preface to H. Ling Roth's, The Aborigines of Tasmania. S. V.)「トーマス」は更に言を強くして「文化の點に於て「タスマニア」人は疑ひもなく、過去數千年間地球上に生存せしものゝ中にて最低度の文化狀態にあるものなり」と云へり、(N. W. Thomas, Natives of Australia, London, 1906. p. 18) 更に「フレーザー」は濠州の動植物が自餘の諸大陸に比して一般に原始的のもの多きと同一の理由よりして、同大陸の住民を以て社會組織上及人智の發達上最低度のものとなし、且つ彼は其結論に於て、人類の進歩は主として彼等相互の生存上の競爭より來るものなり、故に競爭者の數の多ければ多きだけ、又た其競爭が激烈を加ふれば加ふる程、文化は發達するものとなし、殊に天然の障害物によりて他方面と隔離せられし濠洲の中部を以て現今、地球上に於て最低度の人類を研究するに理想的の處となせり。(J. G. Frazer, Observations on Central-Australian Totemism, Journ. of the Anthrop. Institute. 1899 p. 281)

以上、政治組織又たは團體的結合力の極めて薄弱なる點よりして、或は孤立の狀態よりして、或は人類學上より、或は殆んど文化を有せざる點よりして、觀察し最低度の資格を有するものは濠洲土人及「タスマニア」人となす、殊に本問題を研究する

に就きて彼等が好個の材料たる所以は、彼等が太古より現住所に棲息なしおること、全く他より隔離せられしことなりとす、尚ほ以上の種族と略ぼ同一の程度にあるは「ボトクデン」「フォイエルラント」人「アンダマン」菲律賓の「ネグリトス」「ブッシマン」「セリー」印度人「ウェーダ」等なりとす、而して是等の種族の文化が如何に幼稚なるかは數の計算によりて知るを得可し、濠洲土人は四以上を算ふること能はず「ボトクデン」は只だ一のみ「フォイエルラント」人は三まで「アンダマン」は二迄「ウェーダ」は五までとす、以て其一般を知るを得可し、(Paul Hermant, Les Coutumes et les Conditions économiques des Peuples primitifs, Bulletin de la Société Royale Belge de Géographie, XXVIII, 1904, Bruxelles, p. 19)

吾人は原始民族卽ち「ブヒヤー」教授の所謂、自然人を通じて交換の現象の存在することを證せんが爲め、先づ原始民族中の原始民族にして且つ「ブヒヤー」教授が交換の事實なしと認定せる濠洲土人に就きて見んと欲す。

蓋、原始民族に於て交換の物品として、太古より最も重んぜられ、且つ最も發達せるものは彼等が日常使用せる道具の材料たる石材なりとす、而して此點に於て最も好個の例證を與ふるものは濠洲土人にして、彼等の間には石斧の材料たる閃綠



岩の如き或ひは磨石に供せらるゝ砂岩の如き、盛んに交換の用に供せられ(Edward B. Tylor, Anthropology, London 1881, p. 181-182) 殊に昔時より「ムーレイ」及「グルバン」の種族は「マウント・ヴィリヤム」附近の石坑より採掘せし閃綠岩を以て多數の石槍と交換し、(R. Brough Smyth, The Aborigines of Victoria, London, 1878, I. p. 181) 又濠洲の南東部に住する「ジャジャウルング」族の男子は「シャロッテ」平原附近の石坑より石斧の材料に供せらるる石材を市場に運搬し、石槍、獸皮、男子用前垂、腕輪等と交換するを常とす、(A. W. Howitt, The Native Tribes of South-East Australia, London, 1904, p. 717-718 and p 311-312) 其他、東部諸種族と西部及南部諸種族とが商業上の中心たる「コッペラマナ」に於ける交換の狀態を見るに前者は多く盾、木製品等を齎らし、後者は石材を以てす、(Ibid, p. 716) 又「クインスランド」にても石材は最も重要なる商品たり、(N. W. Thomas, Natives of Australia, London, 1906, p. 50) 斯くの如く石材が重要なる交換物たる結果は、之を轉賣して利益を求むる商人を生むに至れり「ディエリー」族卽ち之なり、彼等は終生、轉賣の業務に服し、其の商品を長く手許に有することなく、前日得しものは其翌日に多少の利益を得て交換す、(R. Brough Smyth, The Aborigines of Victoria, London, 1878, I. p. 182) 此事實を見ゝ

も「ブュヒヤー」教授が「自己が利益を得て轉賣する目的に付て、規則的に職業的に組織せらるゝ物品の仕入は自然人の間に決して存在せず」と云へるは正當なる批判にあらず、尙ほ石材以外に濠洲土人が交換の用に供するものには「ピッリー」(Duboisia Hopwoodii) なる植物あり、(N. W. Thomas, Natives of Australia, London, 1906, p. 117) 又た裝飾品として「ロンカ、ロンカ」(貝殼 Melo aethis pica 及 Meleagrina margaritifera 等より製造せらる) (Spencer and Gillen, The Native Tribes of Central Australia, London, 1899, p. 573.) 尙ほ「ロス」は「クインスランド」の幾多の地方に於て極めて組織的なる且つ永久的なる交換的交通と、昔時より使用せられし商業上の通路の存在せることを證せり、(Walter E. Roth, Ethnological Studies among the North-West-Central Queensland Aborigines, London, 1897, p. 132) 次ぎに人類學者が見て漸く石器時代に達せりとなす「ボトクデン」族に就きて「ツー、ウキド」が記述せる中に、

「土人と交易をなさんが爲め、余は彼等に小刀、手巾等を示せしに、彼等は武器其他の道具と交換せり、彼等は殊に鐵製品を愛するが如し」(Maximilian Prinz zu Wied-Neuwied, Reise nach Brazilien in den Jahren 1815, bs 1817. Frankfurt. 1820, I. 3. 344)



又た「ブュヒヤー」教授が屢々引用せる「エーレンライヒ」も土人が斧或は鍋等を得んが爲め自己の子女を賣却せる事實を認め、彼自身も亦自己の所持せる燐寸一二箱に代ゆるに二個の木棒と橘子とを以てし、又た或時は煙草、小刀、釣鈎とを以て美事なる弓矢等と交換せり。(P. Ehrenreich, Ueber die Botokudos der brasilianischen Provinzen. Zeitschrift für Ethnologie, 1887, B XIX. s.38 u. Laud und Leute am Rio Doce Verhandlungen der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin. N 13, 1886. s 106) 以て此種族間にも交換の現象存するを知るを得可し。次ぎに「ダーウキン」が世界に於ける人種中の最低度のものとなせし「フォイエルランド」人に就きて「スノー」の記述せる中に Addicted to thieving yet honest in barter の語あり (W. P. Snow, A two years Cruise of Tierra de Fuego, etc. London, 1857, I. p.344 and II, 12) 其他此土人が自己の所持せる獸皮、道具、弓矢等を以て煙草、食料品、衣服等と交換せし實例は屢々歐米旅行家の書中に散見する處なりとす、(E. du Valdailly, Notes sur les Fuégiens de la baie de l'Isthme. Bulletin de la Société d'Anthropologie de Paris, 1876, p. 294 u. Frank Vincent, Around and about South America, New York, 1897. p. 124) 殊に「フッロイ」の如きは「フォイエルランド」人と「パタゴニア」人との間に明かに商業的關係の存在せることを證せ

り。(R. Fitzroy, Narrative of the Voyages of the Adventure and Beagle, London, 1839. II. p. 172) 次ぎに「ベンガル」灣頭の諸群島に棲息する「アンダマン」族に就きては、殆んど十一年間、土人の部落内にありて研究せし「マン」の説く處によれば、彼等は此群島内に於ける原始民族にして今日迄何等他人種と混血せず極めて原始的の種族たるに不拘、然かも沿岸の土人(âryôto)と内地の土人(êremtâya)との間には諸種の道具及Dentalium ocogonum の如き裝飾品に就きて交換行はれ、其場合に於て之れが交換の手段となるものは砥石及槌なりとす、(E. H. Man, On Andamanese and Nicobarese Objects, Journal of the Anthropological Institute, London. 1882. p. 285 and. on the Aboriginal Inhabitants of the Andaman Islands. Journal of the Anthrop Institute. 1883. p. 339-340 and p. 881.) 尚ほ「マン」の記述せる中に、

「沿岸の土人と舞踏を催す際には、必ず交換物として豚肉、木矢、漁網等を齎らし、歌舞終つて後、相互に物品を交換し、一二日の後、其交換物を集めて暇を告げて歸るを常とす」(Man, Andamanen and Nic Obj. 20)

次ぎに亞弗利加大陸に於ける最古の住民と稱せらるゝ「ブッシマン」は、何等組織的の團集なく、又た一定の住所を有せず、然かも個々の種族間には交換の作用行はれ、



現に「アィクウェー」語には「買ふ」の語あり、(S. Passage, Die Buschmann der Kalahari, Berlin, 1907, s. 143) 尚ほ、以前、此地方が動物に富みし際には專ら、獸皮、象牙、駝鳥の羽毛等を交換の物品として使用せり、次ぎに「セリー」印度人も亦た同じく原始的民族にして半ば野獸の境遇を脱せる犬の外には何等の家畜を有せず、全く孤立の狀態にあるに不拘、尚ほ各民族を中心として、獸皮の交換をなせり、最後に「テンネット」が錫蘭島に於ける原始民族となす「ウェーダ」は森の「ウェーダ」野の「ウェーダ」に分たれ、前者は狩獵の獲物を乾燥して交換の用に供せり。

現時に於ける最低度の原始民族を通じて、交換の現象の存することは以上示す處によつて明かなりと信ず、吾人は更に進んで考古、言語兩學上より之れが存在を證せんと欲す。

我邦に於ける考古學の研究は充分發達せりと云ふこと能はずと云へども、然かも在來の研究材料によりて之れを證明し得可きものなきにしもあらず、例へば石器時代に使用せられし石材として黑曜石は一名十勝石と稱せらるゝ如く、其產出殆んど十勝に限らるゝに、此石を材料とせる石鏃、石槍、剃刀等の北海道全土に普ねきを見れば此時代に於て交換的交通の行はれしを知るを得可く、其他「サヌカイト」

の如き、下總の緒締石の如き、陸奥龜ヶ岡より出でし青玉の原料の如き、何れも石器時代に交換的交通の存せし例證たり得可きものなりとす、中澤、八木兩氏の日本考古學の石器時代に於ける外國との交通貿易を說明せる中に、

「小藤博士の研究に係る大港產の石材にて造れる石斧の發見は本節の證據物件として頗る有効なれども、右は一品にして少しく物足らぬ心地すれば左に他の一二を紹介す可し。

日本の石器時代遺跡より發見せらるゝ色料は、單に赤色に限れども、此の中には鐵朱卽ち學名上、赤鐵鑛、代赭石(Haematie)と稱する無水の酸化鐵と、今一つは學名辰砂若くは靈砂(Cinnaber)と稱する水銀朱の二つあり、此中後者は日本の產地甚だ乏しきが上に、其整法上必ず「スタンプ、モルター」及び「ミール」等を要するが故に、餘種人智の進みし後ならでは造り得らるゝものにあらず、然るに關東平野、就中武藏の荏原、北豐島兩郡及東京等を初めとして、常陸の稻敷郡中なる石器時代遺跡より此水銀朱を塗りたる器物を出せるによりて考ふれば、右は全く支那邊より輸入せしものならん、勿論、直接にはあらざるべきも、其物の本源地は斯く指定せらるゝも不可なからん。我石器時代の裝飾品中、間々帶綠色にて半透明若く



ば不透明の石製曲玉及び曲玉類似の品を出すことあり、是等の內には其硬度六度を示せり、而して我邦の產石中、是等と能く似たるものを求むれば色合は蛇紋石に近けれ共硬度に差あり、葡萄石は硬度均しけれ共色を殊にせり、唯だ色と硬度と共に右の曲玉類に似たるは支那硬玉なり、故に是等の材料は前記の水銀朱と同樣間接に支那より輸入せしならん」。(日本考古學六三―一六四)

更に歐洲に於ける石器時代に就きて考察するに、「ヘルマーン、ゲンテー」の研究によれば白耳義の「アンネーガウ」に住せし石器時代の住民は其道具及武器に使用せる石材(燧石)を佛の「シャムパニー」に求めし形跡あり、又ウルテムベルヒの「シュセンリェラル」の遺跡より發掘せられし六百の石槍及石鏃は同地方にて全く見出すこと能はざる外國產なりとす、其他「ナルボンニュ」附近「ベッヽ」の穴居時代の遺跡より發見せられし貝殼の頭飾及腕飾は共に地中海產にして、(H. Genthe, Ueber den etruskischen Tauschhandel nach dem Norden, Frankfurt, 1874. s. 90-91)同じく「シュワイツェルスビルト」を去る遠からざる「ダハセンビュール」の遺跡より見出されし頭飾は地中海產の蟲類の管骨にして、既に石器時代に上部「ライン」の種族と地中海畔の種族と直接、間接、接觸せしことを知るの證左たり。(Dr. L. Reinhardt, Der Mensch zur Eiszeit in Europa, München, 1906 250)

更に言語學上より交換の事實を證明する爲め、原始民族中の原始民族たる「クィースランド」の「ピッタピッタ」種族の言語に徵するに、彼等は交換の働詞に Pul-ki-woon-je 又たは Woon-ge-mul-le を用ゐ、其他、Woon-je (與へる) in-da-mul-le (要求する) Pin-ki-poo-ra (分配する等の語あり、(W. E. Roth, Ethnological Studies among the North-West-Central Queensland Aborigines, 1897)

溯て「サンスクリット」に之れが語源を求むるに交換の意義に就きては Mê, Máyaté (複數 Ni-mê) の語あり、又た價格に就きては Vasná なる語あり、更に「トルコ、タータール」語にては Teg (價値) tej (直段) 等の語あり、(Dr. O. Schrader, Linguistsch historische Forschungen zur Handels geschichte und Warenkunde, I. s. 61-65) 以て此現象の極めて古き歷史を有すことを知るを得可し。

「原始民族に於ける交換の意義」を中心としては論ず可きこと甚だ多し、例へば維也納大學教授「ヘルネッス」は Stumme Handel を以て商業の最古の形式となすも (Dr. M. Hoernes Natur und Urgeschichte des Menschen, B. II. s. 498) 吾人は此說に反對する理由を有す、又た原始民族にありては交換は必ずしも分業の基礎たるものにあらずと信ず、是等の點に就きは他日稿を改めて論ぜんと欲す。(完)



# 國際法上國家及び國家の分類に關する私論

板倉卓造

國際法上、國家及び國家の分類に關する論究法は、何れの國際法の教科書も、殆ど千篇一律にして、甲乙學者の所說を比較するに、其間に根本的相違を認むること稀にして、大抵大同小異なり。然らば此點に關する國際法學者の研究は、既に一切を試み盡して、又餘蘊なく、從來の論究法を以て、動かす可からざる定說と爲す可きやと云ふに、余案ずるに必ずしも然らず、今日普通に行はるゝ論究法には、滿足す可からざる點多々にして、寧ろ之を根柢より一變せばやと思はるゝ程なり。余の今より述べんとする所は、固より一家の私論にして、今後の研究に依て修正す可きもの尙ほ少なからざる可しと雖も、是までの內外國際法の教科書に用ゐられたる論究法とは、若干面目を異にするものあり、試に其要領を揭げて、先輩大家の批評を仰ぎ、更に研究を積まんと欲するものなり。